秀賞

未来の自分に伝えたいこと

福島県郡山市立富田中学校
３年　武藤　さくら

「今日のコロナは何人？」
という会話が、我が家の夕食時の当たり前になった 2022 年。「ウィズコロナ」が浸透しつつある中学校生活。15 歳の私は、部活動を引退し、受験に向けてまっしぐらだ。目標に向けて歩む今、10 年後の私に伝えたいことがある。

「部活って何のためにやっているんだろう。私はチームの役に立てているのかな。」中学２年の冬、私は所属しているバスケットボール部で、繰り返し自問していた。周りの人がどんどんうまくなっていくのに、上達している実感を持てない毎日。試合に出るチャンスをもらっても、ミスばかりしてしまう。「チームに迷惑をかけているのではないか」という重苦しい気持ちが暗く心に広がった。

私は、バスケ部の活動の他に生徒会活動もしている。自分が望んで選んだ二つの道なのに、そのために練習に行けない日が続き、どっちつかずの自分に自信が持てなかった。

私には、同じポジションを競うライバルがいた。彼女は先輩や後輩から慕われ、私とは反対にみんなを引っ張っているように思えた。いつの間にか、ずっと先を歩いている彼女。「３年生になっても、私はきっと試合にはあまり出られないだろうな」と、どこかで諦めている自分がいた。

そんなある日、部活終わりに友人と話していた時のことだ。

「試合でぜんぜんうまくプレーできなくて、邪魔ばっかりしちゃって……」
そう切り出したのは、ライバルの彼女だった。えっ、私と同じことで悩んでいる？　全てがうまくいっているように見えた彼女が、私と同じ悩みを抱えていたことに驚いた。

その日から、私は彼女とよく本音で話すようになった。部活の悩み、プレーのこと、相談したり教え合ったりする時間の積み重ねが、私にとってかけがえのないものになっていた。「みんなに追いつきたい。チームの役に立ちたい。」気がつくと、諦めかけていた自分がどうしたらチームに貢献できるかを考えていた。

私には、印象に残っている言葉がある。
「きっとリバウンドをとってくれると思うから、だから思い切ってシュートをうてる。」

チームメイトが仲間にかけた言葉だ。共にきつい練習を乗り越えてきたからこそ生まれる信頼。それはきっと誰かの力になる。仲間が最高のプレーをすると信じているから言える言葉だ。この言葉を聞いて、私も自分が任された役割を、全力で果たすことで、みんなの役に立とうと決めた。チームの一員として。

それからの私は、うまくいかなかったプレーがあれば、どうしたらできるかをスタメンに教えてもらうようにした。試合では、難しいシュートに挑み、外してしまうこともあった。でも、そんな時、みんなはいつも、

「ナイスチャレンジ！」

と声をかけてくれた。その言葉は温かく、再び挑戦しようとする力をくれた。キャプテン、スタメン、交替選手、応援。互いが高め合い、補い合うことで、チームができていくことを実感した。最高のプレーを目指し、仲間と挑む瞬間はすがすがしい。

３年生になり、部活動を引退した今、最後まで目標を持ち、部活動を続けてきたことを誇りに思う。一心にボールを追いかけた試合。一人一人の努力がチームの力に結びつき、勝利を掴んだ瞬間の達成感。ライバルといえる存在のありがたさ。諦めない自分がいたから、今の自分にたどり着くことができた。困難な状況だからこそ、一歩を踏み出す勇気が大切だったと気づかされた。

思い返せば、これは部活動に限ったことではない。私が今、置かれている状況も同じだ。コロナウイルスが流行し始めてから、私の生活は一変し、小学校卒業式、中学の学習旅行、文化祭、どれをとっても「例年通り」にはいかなかった。しかし、一方で、私たちはコロナ禍でもできることを模索し、仲間と話し合い、挑み続けている。タブレットを活用した交流、密を回避して行った合唱コンクール、ズームによる生徒会選挙はその一例だ。何かのために困難を打破しようとする気持ちは、次の一歩を踏み出す原動力となり、新たなアイデアをもたらす。直面するさまざま々な壁を、仲間と一緒に乗り越えることは、心地よい。そう思える「15 歳の私」がここにいる。

10 年後の私へ。

25 歳になったあなたは、何をしているだろう。医学研究者になる夢を実現しているだろうか。もし、新たな困難に直面していたら、15 歳の私を思い出してほしい。「うまくいかない」と感じる時、その困難な状況を一歩踏み出した先には、そこでしか気づけないことがきっとある。だから、挑戦し続けてほしい。15 歳の私があなたを応援している。